

「水泳の授業」をグループ学習でどうつくってきたか

中川孝子（大阪・中川小学校） 19 95.10.28

I. はじめに

II. 「世間が言うグループ学習」とは

1. 水プロと私の実践の足あと
2. 学校体育授業事典(1995)より
3. 出原氏のグループ学習論

III. 「私のグループ学習」の一つの到達点

1. 90年小6実践

「系統学習+グループ学習=?」の概要

2. 91年小3実践「3年生でも計画がたてられるか」
3. 94年小6実践「みんなで早くからみんなで速くへ」

IV. 「私のグループ学習」のたどった道

1. グループ学習の芽生え
2. ペア・トリオ学習へ
3. ペア・トリオ学習で 見えてきたこと
4. わからせる内容の精選
5. スモールステップを卒業したグループ学習へ
6. 子どもたち自身が計画を立てるグループ学習

V. グループ学習の新たな展開

1. 水プロでの活動から
2. 教科内容研究の深化につれて

VI. グループ学習にこだわる理由

1. 子どもたちを結びつけるグループ学習
2. グループ学習は子どもの「観」を変える

VII. グループ学習が敬遠される理由

1. 様々な条件の欠如
2. 「わかる」内容の欠如
3. 水泳の授業こそグループ学習で

VIII. 「グループ学習事始め」のために

1. 必ず、学習ノートを
2. 子ども同士の観察や 教え合いを

「水泳の授業」をグループ学習でどうつくってきたか

中川孝子（大阪・中川小学校） 19 95.10.28

I. はじめに

大阪支部の中川です。現在、大阪府の中川小学校に勤務しております。偶然ですが名前が同じ中川なんです。

「この推進講座に来てくれないか」というお話があつて、2日前に才藤先生の方からこのレジュメを送って頂いたのですが、講師紹介のところを見ますと、2行目に「永いこと大阪支部水泳プロジェクトで活躍され・・・」と書いてあり、この「ながい」という字が「永遠」の永という字になっているのですね（会場大笑い）。これを見ると私は、永久に水プロ（水泳プロジェクトのこと）をしなくちゃいけないのかとちょっとゾーッとしたんですけれども・・・。

演題が「教科内容のグループ学習実践」と書いてありまして、これまた難しくて、「何を話したらいいのかなあ」と、よくわかりませんでした。それで、私は小学校の教師ですから、難しいことは話が出来ませんので、私が水泳プロジェクトで勉強しながら、あるいは大阪支部の例会で勉強しながら、グループ学習をどういうふうに創ってきたかという話ができたらと思ひまして、タイトルは「私と水プロとグループ学習」というかたちにさせていただきました。

それでは、話をさせていただきます。

II. 「世間が言うグループ学習」とは

1. 水プロと私の実践の足あと

資料の一番最初のページの左側（資料 p.1）に「水泳プロジェクト活動の足あと」をあげています。愛知支部で、この4月に水泳プロジェクトの活動を報告してほしいと頼まれた時に書いてみたものです。その右側の所は私の実践報告の題を書いています。これをまとめる中で、私としては「ああ、こんな流れで自分は実践をやっていたんだなあ」とよくわかりました。

この表中の具体的な内容がどんなかたちで変わってきたのかということが今日の話の主たる中身です。あまり難しい本を読んで勉強をしてきておりませんので、言葉の使い方等は、非常に曖昧です。例えば「グループ学習」ということを挙げていますが、よく「そんなグループ学習と違うでえ」と言われることがあります。その辺の考え方も「とりあえず、今はこれがグループ学習だ」という感じで言葉としては使っています。

2. 学校体育授業事典(1995)より

(1) 細江氏の解釈

ひとまず、普通「グループ学習」と言ったときに、どんな解釈がされているのかということで資料（資料 p.1 の右側）をあげてみました。一番最初のは、この前出ました『学校体育授業辞典』という本から抜粋しました。「グループ学習」というところで、細江氏が書いてます。

「グループ学習は、知識の増大や技能を養うのみでなく、民主的で協力的な人間関係の

育成を図ろうとするところに特徴がある。体育におけるグループ学習は、1950年代初期、B型学習と呼ばれ、集団的種目から始まった。グループ学習は一斉指導のように、受動的になりがちな学習形態を避け、学習者の自発的・主体的な学習活動を重視しようとするものである。そのために小集団を便宜上分けるのではなく、集団内のメンバーの間に相互作用が生まれ、共通の目標をもち、互いに役割を果たしながら学習活動に参加することができるように工夫しようとする」

(2) めあて学習

そこから後のところが官制側の考え方がよくでていいる所なんですけれども、

「今日の体育の（運動目的・内容論）では、グループ学習の理論をそのまま取り込むのではなく、運動の特性と学習者との好ましいかかわり方という視点から流動的な課題別グループを組織するなどして、グループ学習にみられる小集団の集団過程のよい機能を生かそうとする試みがみられる」

これはいわゆる「めあて学習」で、同じめあてを持ったもの同士が集まって学習がなされている。同じ細江さんという人が書いている「ペア学習」のところでも、「ペアの進め方は、固定的に捉えるのではなく、流動的に・・・」というようなことが書かれていました。

3. 出原氏のグループ学習論

(1) 異質集団

それに対してその右側（資料 p.1 の右側）の出原先生の「異質集団」の項ですが、そこでは上から5行目・・・、

「体育では技能の習熟レベルを基準にして、『うまさ』や『できぐあい』の異なる子どもを一つの小集団に混在するように編成したものを異質集団ということが一般的である。・・・（中略）・・・学習の効率を優先する班別学習では等質集団が有効であり、社会性や人間関係を重視するグループ学習では異質集団がすぐれていると主張されてきた。・・・（中略）・・・お互いの途中経過的な判断や認識、技能を出し合い、批判し合うことによって、学習を確実なものにする。自分とは異なるできぐあいやわかりぐあいと交じり合うことによって、学習が深まり、発展するのである。学習集団として異質集団が優位性をもつ根拠はここにある」と異質集団の学習の優位性が示されています。次の資料の出原先生の『体育の授業方法論』のグループ学習のところですが、ここで出原先生は、グループ学習の一般的なものか・・・普通のと言っていいんでしょうか・・・グループ学習の流れをあげておられます。

(2) グループ学習の流れ

まず最初に「A. オリエンテーション」をする。ここでは単元の見通し、全体像というものを子ども達にわからせる。

次に「B. グループ毎の学習」。その単元全体の学習を立て、それをもとにしてグループ毎で1時間毎の計画を立て、実践一総括をする。「計画一実践一総括」のサイクルをここでしっかりと教える。全体の真ん中辺りで、「C. 中間オリエンテーション・中間総括」

などというものが行われて、ここでは軌道修正というものが含まれている。そして、「D. 発表会、記録会、リーグ戦など」を行い、それを経て、全体の「E. まとめ」をするという形になっています。これが一般的な流れです。

資料 p.2 の下の段の前から5行目のところで、グループ学習の発展過程として①～④が挙げてあります。

①グループ学習の学習スタイルそのものを学ぶ段階

②「できる」ことや、「わかる」こと、「みんながうまくなる」ことを共通目標にしていく段階

③「できる」「わかる」「みんながうまくなる」を具体的な方法をともなって実現していく段階

④学習集団が「みんながうまくなること」の実現を課題化できるようになる段階

というように、グループ学習の発展過程として4つのことが示されています。

グループ学習ということを聞いたときに、一人一人頭に描いた「ああ、こんなんだなあ」という「イメージ」はいろいろだと思うのですが、ひとまず、一般的にはグループ学習というものはこういうものだと言われているということで、押さえておいていただいて、その次の「私のグループ学習」というものはどういうものかということをお話していきたいと思います。

Ⅲ. 「私のグループ学習」の一つの到達点

1. 90年小6実践

「系統学習＋グループ学習＝？」の概要

(1) 授業全体の概要

今回、資料の紙を色分けしてみました。(编者註：中川さんの発表では資料が色分けしてありました)水色のページです。最初の年表のところでいいますと、私が自分の授業の中で「グループ学習」として一つの到達点ができたと考えているのが、90年夏の高知大会で報告した小学校6年生を教えた実践です。

「系統学習＋グループ学習＝？」というタイトルの実践報告を行ないました。その授業が、どんな授業だったのかをお話しします。

水色のページがその授業に関する資料です(資料 p.3～p.5)。実践報告全部を付けてはおりませんので、わかりにくいと思いますが、見てください。

これは、対象が6年生で、この学年というのは何故か2年生以外は、1年生から6年生まで5年間を私が担任をしました。3クラスになったり、4クラスになったりの学年だったので、全部の子どもたちを教えたということではないのですけれど、水泳は一応学年でしましたので、私が指導してきたという子どもたちです。この授業の教師のねらい、つまり私のねらいなのですが・・・

資料 p.3 の左側に①、②、③とあげてあります。

①各泳法、特に近代泳法のわからせたい内容を整理し、何をどういう形で子どもに与えていくか研究する。

②子どもたちに、授業づくり(授業計画)にどう関わらせていくか、各学年の発達段階に照らして試みる。

③ドル平泳法からの水泳の系統指導を職場 に根づかせる。

私としてはこんなねらいを持って授業に臨みました。子ども達の目標というのは、6年生でしたから、1つ目に、平泳ぎとクロールで100mを泳ぐということ。2つ目に技能的なこと例えば平泳ぎとクロールで効率のよい泳ぎにしていくような泳ぎの質を高めていくという目標にしました。それから3つ目は、各泳法のポイントがわかり、友達をつまづきを見つけて教え合いができること。4つ目に学習計画を立てられるということあげています。この学習計画を立てるということは、実践では新しい取り組みでした。

(2) 授業の構成

授業全体の構成ですが、最初にオリエンテーションで全体の水泳の学習の仕方やそれから計画の立て方とか、もちろん学習の目標の話をして、最初に実技オリエンテーションをしました。ここで言えば、ワンキックドル平からクロールまでのところが実技オリエンテーションのかたちになっています。後のところで習熟練習をする総合練習がそのところにあたるのです。そしてまとめをするというのが、私が考えているグループ学習の一つのかたちです。教師が子供たちにわかって欲しいこと、平泳ぎなら平泳ぎ、クロールならクロールで「これはすごく大事なことから、抜かさずにちゃんと理解して欲しい」ということがあります。このこととグループで自分たちで考えて、見つけ、その練習をきちんとしていく。そのことを、どのようにドッキングさせていくかということを考えていった結果として、このような形が出来てきたのです。

(3) 実技オリエンテーションの姿

具体的な授業の流れで言いますと、その次のページのところ(資料 p.4)です。これは、プールに入って3時間目、「ワンキック・ドル平」です。よりよく進む方法を考えようという時間の授業の記録です。これは、1時間の授業の中で私がどんなことを言って、子ども達がどう反応したかを書いたものです。毎時間、こういうのを書いていって授業実践を振り返っていたわけです。

この時間、まず子ども達は着替えをして、プールサイドに現れます。その時には、子ども達は教室で、今日やる授業で何をするかということについて既に話し合っているのです。どう練習を進めていくかということの計画を持って、プールサイドに集まるわけです。必ずグループでまとまって来て準備体操をして、シャワーをあびて、水慣れをして、そして復習を始めるのです。全員が揃ったところで、私が全体を集めて「今日はこういうことをするんでしたね」と確認します。例えば、「ワンキック・ドル平でより前へ進む方法を見つかるんでしたね」と言い、子ども達はグループで学習を進めていきます。

授業をずっとやって半分くらいの時間が過ぎたら、また集めて1班から順番に発表させます。そこで、一番進む方法を子ども達の中から出させていくのです。当然同じ答えも出てきますし、正反対の答えも出てきます。正反対な答えが出てきたときは、実際はどうかということその場で、例の子どもを何人か出して調べてみたり、大きな違いだったらもう1回グループに返して考えさせます。このようなかたちで確かめて、ここで1つの答えをまとめます。「ここでは手を大きくかいたらいいね」「今、うねりをしたらいいね」とまとめました。

そこで、「じゃあ、手を大きくかくこと」というところから、「ワンキックドル平」から「スーパードル平」へとなり、残りの時間をこの練習にあてていくのです。

そして、教室に帰って授業を振り返って授業が終わって結果を忘れないようにグループノートに書きます。実技オリエンテーションは、だいたいこのような授業になっています。

(4) 習熟練習

そのつぎのページの所は（資料 p.5）、習熟練習の時間です。

これは、習熟の段階だから、「それぞれのグループのめあてを持ってしっかり練習しよう」というめあてで、子ども達の計画に従ってずっと練習します。時間が終われば、その内容をグループノートにまとめるという形の授業になります。

この 50m のかき数を測った時には、質の高い泳ぎを問題にしていましたので、かき数が少ないほど質が高いといえないかと授業の中で試していました。

2. 91年小3実践「3年生でも計画がたてられるか」

(1) 授業の概要

その後の黄色の3枚の資料（資料 p.6～p.8）は、91年の実践です。ここで前の学校に転勤して、3年生を担当しましたので、そこでドル平の実践をしたんです。3年生という段階で、学習計画が本当に立てられるのだろうかということがこの実践では私の1番大きなねらいでした。

この右側（資料 p.6）の授業過程の所を見てもらうと、ドル平を16時間かけてやっています。その1時間目でオリエンテーションをやっていました。ここで3年生の目標の確認とグループづくり、授業の仕方の練習をしています。

(2) 授業の流れ

そして、5時間で実技オリエンテーションをして、ドル平の第1段階として、しっかりとわかって欲しいことを、ここで実験させながら確かめました。足のけり方については発問とか実験とかではなく「足はこういうふうにけるんだよ」と教え込みました。

その後の6時間を習熟練習に充てています。ここでは、一応オリエンテーションで勉強したことをものさしにして、友達の泳ぎを見て、教え合い、練習をしていくのです。

資料 p.7の実技オリエンテーションのところですか。これは3年生ですので、準備体操は最初のうちは一斉にやっています。どんな体操をしたらいいか子ども達にわかってもらうために、最初はいっしょにやっていきます。そして、今日のめあての話をして練習します。そして途中でみんなを集めて結果をまとめます。残りの時間は今日勉強したことを練習しようとなります。

次のページ（資料 p.8）は習熟練習です。ここは、その時間のめあてを確認した後はグループで練習していきます。3年生でも自分たちでやることを決めてやっていくことができました。

(3) グループノートの実際

最後の黄色いページ（資料 p.9）が、グループノートの例です。グループ学習の時間の

ものです。あまり物持ちがよくありませんで、グループノートとかまとめた実践報告とか終わったら棄てることが多いので、90年のグループノートが1冊も見あたりません。これはそれから3年先の93年の5年生の時の水泳の授業のグループノートです。

だいたい私のグループノートというものは、こういう形のものでして、最初にめあてを書くところがあって、その次の所に、時間の帯が書いてあって、そこで何をするかを子ども達も書いて、その横に具体的なことを書いて、その④と書いてあるところは、授業を終えて、たとえば実験をするところだったら、実験の結果をここに書くというコーナーです。その下に、一人ずつがその時間、気をつけなければいけないことなどを書きます。このコーナーはその時間の内容によって、たとえば、何が、いつ、できたかを調べる時間だったら、ここに「かき数がどれだけ、いつできたか」を書くようになっています。

そして、ノートの右側のページには、感想文を書きます。

1冊のノートを回していたら時間が足りないので、だいたいB5サイズの半分の大きさの感想文用紙を毎時間授業が終わるごとに、子ども達に配ります。感想とその子どもに対するアドバイスをグループの子が書いて、グループ全員のものをはります。

資料 p.9 の上の学習ノートは、1時間の流れです。

下の所（資料 p.9）は、実践記録の中に、ノートの書き込みがありましたので、説明します。90年の水色の資料の、クロールのところ（資料 p.3）で「息つきをした方の腕を水に入れたときに、入れた手を前に伸ばすのとそうでないのとでは、どちらがよいか」を調べさせたときのものです。ここは実験ですので、どんなふうの実験するのかについて子ども達が計画を立てています。

右側の方に授業が終わってから、結果と感想を書いています。子ども達は、プールサイドに来る前に、今日の計画の所と気をつけることとをグループで話し合ってから書き授業が終わってから、授業を終えてというところと感想を書くことになります。

3. 94年小6実践「みんなで早くからみんなで速くへ」

今、お話ししたような授業が私のグループ学習の到達点です。今のところこういう授業をしているということです。

レジメには、94年の実践と書いてあるんですが、これは去年の夏の実践で、冬大会でちょっと報告をしました。冬大会では水泳で歴史の勉強をしたことを発表したんですが、もう一つクロールのスピード追求、速くということを求めた授業をしました。クロールで長く泳ぐためのポイントはある程度こちらもわかっていますが、速く泳ぐためのポイント、わからせたい内容というのをあまり教師がわかっていないので、どうしたら速く泳げるかということグループで見つけていくようにしたものです。いくつかの実験をしてクラスみんなで答えを見つけて、その答えをもとに習熟練習をしていったものです。

IV. 「私のグループ学習」のたどった道

1. グループ学習の芽生え

(1) 教え合いを大事に

私のグループ学習という所にはいます。当然、私は教師になって水泳の授業を始めたときからこういうような授業をしていたわけではありません。どういう過程をたどって今

があるのか振り返っておきたいと思います。

まず、一番最初はペア・トリオ学習から取り組んでいきました。

次の青色のプリント（資料 p.10～p.11）を見て下さい。

83年からの4年間に、初めてまとまった授業をしたんですが、これはペア学習をしました。大阪支部ではその頃70年代終わりから80年代にかけて、「良い授業とは何か」というテーマで研究をしていたんです。出原先生が大阪におられたので、その影響もあって、友達同士の観察や教え合いを授業の中で大事にしていかなければならないということが、かなり言われていました。それを勉強しながら水泳の授業でもできないかと考えて、ペアを組んだのがきっかけだったと思います。

(2) ドル平との出会い

資料の11ページの中に、「水泳でつきたい力」というのがあります。これは、小学校3年生の授業ですが、「短時間で泳げるようにしたい」ということしか頭にありませんでしたから、とにかく少しでも早く……。

25m泳げたら、50m泳げるようにしてあげたいということしか考えていませんでした。もちろん、最初はドル平泳法も知りませんでしたので、バタ足の指導をして面かぶりクロールを教えていました。でも、その中でとにかく息つぎを教えないと泳げるようにはならないと感じて、息つぎから教える、呼吸法から教える泳ぎがあるというのでドル平泳法の講習会に出て、そこで初めてドル平に出会いました。そして、すぐに授業で取り組んでみました。それが、この年の3年生だったわけです。これまでの目標と学習形態の変化というところです。

2. ペア・トリオ学習へ

(1) ペア学習の始まりとその理由

3年生の時は2人組をつくりましたが、ペアとは名ばかりで単に交代して泳ぐか、ドル平のリズムを言わせただけの一斉指導でした。授業が進むにつれて、私は次第にあせり始めました。児童は50名と少ないのですが、教師2人ではとても目が届きません。一つの注意をしても、それができているかどうか見分けることもできなければ全員にできたかどうかをいってやることも到底不可能なことでした。

どうすれば全員を泳げるようにしてやれるかが、常に頭から離れませんでした。これには、子ども同士の力を借りるしかありません。

この3年生の授業でこういう事に気がつきました。子ども同士がせっかく2人組を組んでいるから、子どもの力を借りるしかない。教師が教えるというのは無理だと気がついてペア学習というものを始めていきました。

(2) ペア学習での失敗

その後、ペア学習をしていく中でわかってきたことがその次のところ（資料 p.10～11）に書いてあります。

4年生では2人のペアを固定し、教え合いを強調しました。ペアの決め方は、機械的に背の順にしました。実はここに欠点がありました。ペアをどういうふうにするかについて

はそんなに深く考えずに始めていったわけです。子どもたちは、確かにどんどん泳げるようになっていったのですが、どうしても何人か泳げない子が残っていくのです。その時に、「泳げない子のペアはだれ」と聞いたら、その相手の子も泳げない子であるということに気がきました。それで、泳げない子同士のペアというのは、あまりうまく教え合いというのができてないんだなとわかったのです。ということから、水泳はただ泳げるようにするだけじゃなく、泳げるようにするためにこそ、わかるということをすごく大事にしていかななくてはならないということに気がついたのです。

(3) 基本としてのペア・トリオ学習

次の5年生では、泳げる子と泳げない子というのを意図的に最初から組ませて、教え合いをずっとさせていきました。だからここではたぶん・・・たぶんというか間違いなく、上手な子から下手な子への一方通行という教え合い、教え合いとはいえないと思いますが・・・そういう授業が展開されていっただろうと今、振り返ってそう思います。でも、スイミングで泳げるようになった子は下手な子を教えるというのが結構難しいんです。下手な子の泳ぎを見ていくことで、その子も「この子は、ここがあかんからできへんのだな」ということを見つけていく。その事が泳げる子にとっては勉強になるだろうと、ペア学習をずっと続けてきたんです。もちろんグループ学習というのは作っていたのですが、4人組とか、6人組とか学年に応じて・・・。基本はやっぱりペアかトリオ学習の授業をやっていたと思います。この授業は83年に終わります。

3. ペア・トリオ学習で 見えてきたこと

(1) 本当にわかるとは

このころ水プロでよく言われていたのは「わかる」というのは一体どういうこと何だろうかということでした。水プロに内田智子さんという仲間がいました。元気のいい女の人で中学校の先生だったんです。彼女が言うには、

「中学生くらいの子どもだったら、グループノートには、その時間わかったことを書きましようと言うと、完璧に書いてくる。でも、それは教師が言ったことをそのままオウム返しに書いてくる。これで本当にわかったといえるのか」と。それが、きっかけでした。「できる・わかる」とよく言いますが、わかるためにいったん子どもたちの頭をくぐらせる、考えるということさせなければならないのではないか。教えたことをそのまま子どもたちに言うのではなくて、まず質問をして、子どもたちがその答えをみつけてくる発問形式の授業をしたらどうかということになりました。

その頃の実践報告に三浦・渡瀬実践がありました。例えば息つきで、「息は鼻から出した方がいいか、口から出した方がいいか」を子どもたちに問いかけて、子どもたちはいろいろ試してみる。例えば、「鼻やったら苦しいな」など出てきました。

(2) 「わかるさがし」

この頃の授業では、考えさせた上で「わかる」ことをねらっていたのですが、そうなること、問題を作るためには、「何を」という答えのほうははっきりしていないと問題をつくれません。それで、ドル平で「わかる」ということはどういうことか、クロールで「わか

る」ということはどういうことか「わかるさがし」をどんどんやってきました。今だからこそドル平でわからせることは何かを私たちは持っていますけれども、その頃は何もわからない手探りの状態でしたから、まずしたことは、子どもたちがその時間終わって何がわかったかを書かせ、その中から逆にこれをわからせなくてはならないというのを見つけていきました。だから、ノートを書かせるということをすごく大事にしていきました。

ドル平のスマールステップがあります。それぞれのステップを教えた中で何がわかったか各段階毎にわかったことをザッと拾い上げて、抜き出していくという作業をう～んとしていきました。ですから、その頃の授業というのは、水色の最後のページ（資料 p.10）の左下にのっていますように、各時間にステップを何級から何級までをやるという授業をしていました。例えば3次、4時間目のバタフライは9級から6級までをやる。ノートにも当然今日勉強した9級から6級までの間でわかったことを子どもたちは書いていくわけです。そこから、「わかる」内容を見つけていく。そして、精選していく。しぼりこんでいく。そういう作業をその次にやりました。

(3) ドル平を通して、何がわかったのか

そのことについて若干わかるのが、水色の資料（資料 p.11）の「とどNo. 39」です。この「とど」というのは、水泳のプロジェクトがニュースとして出しているものです。このニュースは、後で見るとその頃どんな問題意識で、どんなことを考えていたかというのがよくわかるすごく貴重な資料になっていると思います。

それを見ると、ドル平の「わかる」はこれだということで、ドル平のステップを左側に書き、そこで「できること」をとなりに書き、その中で子どもたちに、わからせることにこういうものがあるだろうと並べて書いてあります。

この作業で気がついたことは、最初の段階から最後の段階までわかる内容としてずっと続いているものと、そうではなく、その段階のところだけ出てくるものがあるということでした。各ステップでわかることといたら膨大な量になります。それを整理していき、図式化しだしたのがこの表だと思うのです。

4. わからせる内容の精選

(1) 4つのわからせるポイント

つまり、「呼吸」「脱力」「リズム」それから「姿勢制御に関すること」は、最初の呼吸の練習のところから最後のドル平で長く泳ぐところまでずっと出てくるというまとめ方ができてきたのです。

このわかることのとらえ方が、後々「わかる」というものを絞り込んでいく時の非常に貴重な考え方のきっかけになるというか「わかることの見方」というものになっていったのです。

各ステップ毎から少し抜け出して、この4つのことに絞り込んで子どもたちに教えていけばいいのじゃないかということがこの辺で見えてきたわけです。だから、主にこの4つに関して発問を作っていく、授業の進め方が変わっていったわけです。

(2) ドル平でわからせること

その資料が「わかる」の精選のところの資料です。ピンクの資料です（資料 p.12）。この授業というのは、一番最初のまとまった授業の次のところです。

そこではどうしたかということ、ドル平でわからせたかったことは、①正しい伏し浮き姿勢、②息つぎの方法、③息つぎのための手のかきとあごを上げるタイミング、④姿勢を戻す方法、⑤リラクゼーションのこの5つを考えているわけです。その内の①③④に関しては実験をしてわからせ、②と⑤に関しては教え込みをしています。例えば、さっきの5つにまとめてきた中から授業の中では、すべてを発問したわけではなく、これは発問を通して1度試してみようというものを授業に仕組んでいったわけです。

(3) 授業での発問と反応の実際

資料の次の頁のところ（資料 p.13）で、それぞれの発問で子どもたちがどんな反応をしたかということをもとめています。例えば、「腰まで浮かすにはどうしたらよいか」という質問では、「力を抜く」「あごをひく」「腰を浮かす」という意見が出てきたということです。「あごをひく」というのが、こちらとしては意図していたことなので、もう一度それを確かめさせて「あごをひくということが大事なんやね」と押さえたということです。

この頃を見ると、例えば4時間目。「あごを上げたら、顔はどこまで出るか」というのを実験させたりしています。これは、ドル平でわからせたい③についての実験の一つです。ところが、「『腕のかきは口を出す助けである』ということをつかせることで、腕のかきすぎをなくすということをやってみたけれども・・・」とあるようにうまくいきません。「『自分の手を見てから手を動かす』という指導は距離を伸ばす段階でしているが、子どもたちの意識のなかには残っていない。もしかするとこれは次の段階で教える内容かもしれない」とあります。

(4) わからせる内容の順序性

わかる内容についての意識させる順番みたいなことを授業の中で、こちら側が考え始めるわけです。今まで並列的だったわからせたい内容を、子どもたちに授業の中で教えていく時には、どんな順番で意識させていったらよいのかを教師は考えなくてはいけないということに気づき始めていったわけです。

その次の年の実践報告（資料 p.14）ですが、その授業では、その順序について問題にしています。ここでも、指導過程で示すように、発問としては「伏し浮きで、腰まで浮かすにはどうしたらいいかな」とか「この伏し浮きから息つぎをするには、どうしたらいいかな」と用意しています。

この年は、その次の資料のところ（資料 p.15）に表があります。ここでどういうことをしたかということ、7月2日から16日までの習熟の中で、どのような要素が意識されていたかを表にしています。この表を使ってどういうことを考えていったかということ、例えば「手のかきを意識しているのは後の方なんだな」とか「足のけりなんかは足のけりを教えたときには書いているけれどもそれ以外にはあまり意識されていないんだな」とか「力を抜く。リラクゼーションに関しては、大体変わらずに書いてるな」とか、いつ頃子どもたちが何を意識しているかということをもっているわけです。この作業を通して「わかる」内容を意識させる順序性、順番を教師がつかんでいくのです。

5. スモールステップを卒業したグループ学習へ

(1) 系統指導とグループ学習の統一

そういう作業を経て、ドル平でわからせる内容としては、第1段階があって、ともかくある程度泳げるようになったら、次のさらに質を高めていくために、第2段階として子どもたちに意識させていった方がよいという内容があるなど気がついていったのです。

上の発問の仕組み方についても、まず最初にわからせたい内容について質問をしてある程度習熟練習をして泳げるようになった段階で、更に質を高める泳ぎを意識させていく授業の作り方ができるようになったわけです。それが、レジメの「スモールステップを卒業したグループ学習で」なのです。

それまではステップに従って全員の子どもたちが同じステップをたどる授業だったものが、ドル平ならドル平という泳ぎの要素、そこで抜かさずにわかってほしいことを先にあげて、実験などでわからせておいて、そのあと習熟練習の中でそれぞれの子どもたちが自分にあった練習をしていくという授業に変わっていったんです。細かいステップを、全員が同じようにたどっていくということをしなくて、子どもたちは泳げるようになる授業に変わっていったわけですから。

(2) 各泳法でのわからせること

次の資料は（資料 p.16）、ドル平、クロール、平泳ぎについての内容があがっています。バタフライと背泳ぎについてはないんですが、背泳ぎというのはほとんど授業でされていないということがあって、まとまったものは出ていません。

それから、バタフライのわかるについては、その右側の表の下に少し書いてあるのですがバタフライのわかるとしては、より進むためのうねりをどう作るかということ。それから、そのうねりに伴った呼吸をするための協応動作というあたりを発問してわからせていかなければいけない内容ではないかと思っています。今の段階ということですから、これは今後変わっていく可能性が十分にあるものです。

その資料の右側につけているのは、それぞれの泳法のスモールステップで大阪支部で考えているものです。これは「とどのつまり」にのせているものですので3年くらい前に作ったものですから、今では違うことをやっているところもあります。

クロールは、こんなにいろいろしないでドル平から、「片手ドルクロ」といってドル平で横に息つきをする泳ぎをして、それをバタ足に変え、手のかきを入れて、もっと簡単なものになっています。

(3) ペア・トリオ学習を乗り越えたグループ学習へ

スモールステップをたどる授業からグループ学習を目指し、発問をして実験させるという授業スタイルをとったことで「ペア学習」や「トリオ学習」を乗り越えてグループみんなで何かを調べて答えを出すというグループみんなで勉強するという授業に変わっていったのではないかと考えています。

資料 p.17 であげている「ペア・トリオを越えるグループ学習を」ですが、これは「とどのつまり」に入っているところをコピーしてきました。さっきから話していることのまと

めになるかと思うので、ちょっと読みます。

「・・・一方で教えたい中身が整理され、ドル平で欠かすことのできない要素が絞られてくると、今まで友だちの泳ぎを観察する視点を教師が用意し、子どもたちに与えていたものが、その観察する視点自体、子どもたちに探らせることが可能であると実践を通して分かってきた。そこで、ペアやトリオを越えたグループこそ一人ひとりの泳ぎが全員でわかり、泳ぎの道すじまでも全員で追求していくことができると考えた」ということで、その下に具体的な例があがっています。

「ドル平で伏し浮き姿勢を確保するためには、あごの引き（首の脱力）が大切になってくるが、子どもたちに投げかける発問も次のように変わってきている。

- i 『あごを引いているかどうか、ペアで確かめ合しましょう』
- ii 『伏し浮きで、あごを上げているのとあごを引いておへそを見るのとでは、どちらが浮きやすいですか』
- iii 『沈んだ腰を浮かすためには、どこを、どうすれば良いでしょう。』

i は、観察ポイントを提示している段階です。

ii は、観察ポイントを与え、伏し浮き姿勢がどのように変化するかを子どもたちに考えさせる段階。

iii の段階は、子どもたちが観察ポイント自体を発見させる段階です。同じ問題を投げかけていても、その追求する中身が変わっていつてます。こうすることでペアやトリオによる学習を乗り越えて、みんなで考えて答えを導き出すということです。特に、ii の段階の問題を作っていく時には「子どもたちが本当に答えを見つけてくれるだろうか」という不安があって、いわゆる三択問題みたいな、こっちとこっちではどちらが良いかというような質問になっています。何か当てものみたいになって「これはちょっとまずいな」というようなところから iii へいったんだと思います。それで、観察ポイント自体を発見させるというような授業を考えていったということです。

6. 子どもたち自身が計画を立てるグループ学習

(1) 取り組みのきっかけ

ひとまずここまでは、系統学習とグループ学習をどう両立させていくかということやってきたんですが、グループ学習というと最初の世間が言うグループ学習の「計画－実践－総括をトータルに」という形なのですが、なかなか最初はできなかったです。子どもに計画を立てさせないといけないということをいろんな研究会で聞きはしても私はなかなか実践には移せなかったのです。

私が、授業計画を立てさせなければと思うようになっていった実践が、その次の6の②の資料です（資料 p.18）。88年の授業です。「系統指導とグループ学習の統一をめざして」というテーマで、これは『続・体育の実験的実践』の中に書いたものですが、「グループ学習のもう一つの問題」という最後の考察のところ。うまくなるという部分をとっぱらったときに、どういうことが問題として残っているのかという問題意識でまとめたところです。リーダーが苦勞しているということが書いてあって、その次。下の所の真ん中に子どもの感想文があります。黒田さんという女の子の感想です。

<いろいろな教えてもらった水泳練習> 「水泳はほんとうに、先生や教えてもらった友達

にとてもめいわくをかけていたと思います。最初は、グループの子のほとんどが、あまり泳げなかったけど、だんだん泳げる子が増えてきました。でも、その時、わたしはまだぜんぜん泳げなかったです。

みんな、もうできるようになった時は、わたしはやっと 15m。でもその時はあんまりくやしくなかったです。そして、グループでわたしのほか全員が 100m は泳げるようになったころ、わたしは 30m くらいでした。そして、だんだんみんなにじゃまくさそうな目でにらまれてきました。その時、先生が来て教えてくれました。・・・(後略)」これを私が読んだ時に、泳ぎの苦手な子は「めいわくをかけていた」とか「にらまれてきた」などとかグループの中でなかなかうまくならないことに随分引け目を感じているんだなと改めて思ったわけです。

これは、4年生の実践なのですが、この4年生の時は、決してグループはそんな「義理」で教えあっていたとは見えなくて結構一生懸命泳げない子の原因を探ってアドバイスしていた様子だったんです。「じゃまくさそうな目でにらまれてきた」とか黒田さん一人を、「なかなか泳げない」という感じで煙たがっているような感じもなかったと思っています。

そういうことではなくて、泳げない子も引け目を感じることなく学習に参加できる。グループ学習が、できるはずなんじゃないかなと考えるようになったのです。それは、グループ学習で何を教えていくのか、泳げるようにするという技術的な内容だけではなくて、きっとそれ以外のこともあるんじゃないのかなと思うようになった。これが一つのきっかけです。

(2) 仲良し集団を越えられなかったのはなぜか

さらに、その次の 89 年、5年生の授業で、決定的に私はグループ学習で失敗してしまうんです。それが、資料 p.3 の「90年の実践報告」のところに書いてあります。

「ペアの子は、よく悪いところやいい所をアドバイスしてくれました。でも、どんどんどんどん、新しい部分が入ってきて、頭がごちゃごちゃになって大変でした」

これは同じ黒田さんの感想ですが、この子は相変わらず5年生になってもなかなかうまくなれなくて、苦労しています。一つは、「新しい部分がたくさん入ってきて」ということ。16時間でドル平からバタフライ、クロール、平泳ぎという4種目もやったものだから、ものすごく忙しくて失敗したのは当然なのですが。

この授業で決定的に失敗したというのは、仲良し同士というのは教えあいをよくするんですが、そうでない子同士というのはなかなか教え合いが進まない、仲良し集団が越えられないものになってしまったのです。「仲良し集団を越えられなかったのは、なぜか」というタイトルをこの実践をまとめるときにはつけたのですが、この仲良し集団を越えるために何かがあるはずだと実践をまとめた段階で考えたんです。

(3) 「計画－実践－総括」を子どもの手に

「この実践で、漠然と感じたことだが、教師から観察ポイントを与えられ、教え合っていく形では、教え合いは成立しうまくなっていくが、本当の“みんな”という思いが育たないのではないか。

この形は、学年が進むにつれ、限界があり、なかよし友達を越えにくいように思えてな

らない。学年が進むにつれ、そのポイントをみんなで見つけたり、どんな練習で“みんな”を達成するかという課題が子供たちには必要なのではないか。みんなで計画し、実行し、総括し、次の計画を考えるというサイクルの中でこそ、本当の協力やみんな観が育つのではないか」と思うようになっていった結果、授業の計画を子どもたちの手に任せていくということを考えるようになったということなんです。この次の90年の実践で最初に話をしたような形の授業、実験の方法を子供たちが考え、実験してまとめるという授業の形。

それから、今日の習熟練習では「どういうことをポイントにして練習するか」ということを子どもたちが計画して進めるという授業に行きついていき、今やっているようなグループ学習という形へたどり着いていったわけです。

V. グループ学習の新たな展開

1. 水プロでの活動から

(1) 技術認識を深めるグループ学習

私の実践は、グループ学習としてはなかなか先へ進めていません。毎年水プロで自分の授業をまとめて評価し合うということをやっています。

その中で、奈良の牧野先生の授業が新たなグループ学習を展開していると考えられますので紹介しておきます。一言でいうと、これまでのグループ学習は技能習熟のためのグループ学習と言えるだろうと思います。これは、系統性研究の時代のグループ学習の形だと思のですが、牧野先生は技能習熟のためではなく技術認識を高めるためのグループ学習を目的にしていると思います。

同志会で学力論を言っていたことがあります、その頃のグループ学習だと言えると思います。

(2) 技術のポイントと順序性を子どもたちから引き出す

牧野先生の実践はどのような実践かと言うと（資料 p.19）、平泳ぎを教えたい時に平泳ぎの技術ポイントを教えるのではなくまずドル平と平泳ぎを、泳いでみせたりビデオで見せたりして、その違いを子どもたちに考えさせています。

そして、子どもたちが指摘したポイントについて、例えばドル平の腕のかきは平泳ぎではどういうふうにするのかという予想を立てさせて実験して答えを見つけていく形なんです。ですから、リズムはこう変わる、キックはどう変わる、息つきはどう変わるとそれぞれに予想を立てさせて、こうあるべきだということを実験してみつけていくのです。そして、クラス全体でわかったことを話し合い、技術ポイントをまとめます。

次は、ドル平からどういう順番で見つけたことを変えていけば平泳ぎになるかということ子どもたちに考えさせてステップづくりをしていくという授業なのです。もちろん、牧野先生も泳げるようにするということを無視してはありませんが、授業全体のウエイトのかけ方がどういうふうにしたら平泳ぎにたどりつけるかというところを考えさせることになっている授業なのです。

(3) みんなで考えるクロールへの道

奈良の牧野先生は、一昨年クロールで同じ形の授業をしています（資料 p.20）。ただ、

ドル平から平泳ぎは予想を立てやすいのですが、クロールはあまりにも形が違うように見えるからということで一足飛びにそこまでいくのではなく、ドル平からその間にドルクロというものをに入れて、そこからどうなっていくかということを考えてやっていきます。

クロールを泳げるようになることよりも、どうしたらクロールにたどりつくかということを考えさせることにウエイトをおいた授業なのです。

さらに去年は、平泳ぎの足はなぜカエル足なのかということさをさぐらせる授業をされています。

2. 教科内容研究の深化につれて

今までの所どちらかといえば、技能習熟について教えることが中心だと考えられてきたと思うのですが、教えるべき内容は技術的なことばかりではなくて、歴史であるとか、ルールであるとかいろいろな内容が増加していくであろうし、また整理されて統合されていくと思うのです。

技術的内容についてはそれにふさわしいグループ学習があるだろうし、それ以外の文化的な内容に関してはそれにふさわしいグループ学習があるだろうと考えています。これは今年の中間研究集会などでは探険型学習になるだろうと言われていました。

技能学習とか技術認識に関するグループ学習とはまた違った形のグループ学習が出てくるであろうし、またそうでなくてはならないと思います。例えば、歴史を教える授業では、社会科の例が役に立つということもあるのではないかと考えています。残念ながらその所は内容自体もはっきりした形にはなっていませんし、それをグループ学習で取り組むことはまだまだ手がつけられていません。きっと、それぞれの内容にふさわしい形のものがこれから考え出されていくだろうという気がしています。

VI. グループ学習にこだわる理由

1. 子どもたちを結びつけるグループ学習

なぜ私がグループ学習にこだわり続けたかということ、それはまちがいなく子ども同士を結びつけてくれるものだと思うからです。ただ泳げるようになるだけだったら、コーチについてマンツーマンで教えてもらった方が早くうまくなるだろうと思います。そうではなく、せっかく友だちがいて学校で学ぶ水泳なのだから、うまくなること以外に学ぶことがきっとあると思います。

その内容を言葉としては、子どもと子どもをつなぐものというふうに表しているのです。最初は、励まし合いだと思うのです。「がんばれ」とか「もうちょっと」ということから入り、少し技術的なことがわかってきたら、泳げる子から泳げない子への、「こうしたらいいよ」という一方通行の教え合いになって、さらにそこから、泳げる子もできない子がどこでつまづいているのかを見つけることで、できない子から学んでいき技術的認識を高めていくという学び合いができるようになる。そういうふうに子ども同士を結びつけることができるものだと思います。

グループ学習がそういうものだと思うからこそ、こだわってこれたと思うのです。

2. グループ学習は子どもの「観」を変える

「観」を変えることができる」と書きましたが、これは「友だち観」や「子ども観」つまり、運動神経が鈍いからできないというような捉え方、そういう考えを変えていく力がグループ学習をすることによって身につけていくのではないかと考えています。

90年の実践で、私が特に気に入っている子どもの感想文があります。その感想を読んでもみます（資料 p.20）。

「私の初めの泳ぎ方は、平泳ぎの場合あおり足で整っていませんでした。それが、班のNさんやYさん、その他の人によって直りました。なぜ直ったかは、いろいろ声をかけてもらったからだと思います。（中略）その時に自分もうれしかったけれど周りのみんなが喜んでくれたのが、何よりうれしかったし、励ましにもなったと思います」という感想です。また、「私がクロールと平泳ぎで100m泳げた時一番感動したことは、Uさんたちもすごく喜んでくれたことでした」という感想です。

ペア学習にしたってそうですが、教え合いをしていると、「友だちが泳げてすごくうれしかった」という感想がいっぱい出てきます。ところがそれを泳げなかった子どもが「泳げるようになってよかったな」とただ言うのではなくて、周りの子が、自分ができたことを喜んでくれているということがうれしいと思っている。これは、一味違った感想だと私は感じるのです。グループ学習をやることで、「友だち観」が子どもたちの中に目に見える形ではないけれど、少しずつ積み重ねられていくと思うのです。それがグループ学習で教えることの中身だと思うからこそ、たとえ時間がかかったとしても、やっぱりこだわっていきたい、いかざるを得ないと思うのです。

VII. グループ学習が敬遠される理由

1. 様々な条件の欠如

推進講座のご案内で送られてきたこのレジメの中で「水泳の授業でもグループ学習は可能である」と書いてありますが、なぜ水泳でのグループ学習が敬遠されるのかということについて、私なりに考えてみたいと思います。

水泳に限らず、他の授業でもグループ学習ができない理由を考えると、一つは場所がないことだと思います。このあたりの学校だったら、きっと運動場も広いでしょうが、私が勤めている大阪市内はもう本当に狭くて、50m走ったらすぐ目の前に壁がくるような学校ですので、こういう場所では50m走でグループ学習なんてできないと思います。

もう一つは、時間がない時です。時間数が限られていて十分な時間がひとつの教材にかげられない時もグループ学習は仕組みないだろうと思います。他の府県ではどうか知りませんが、大阪市内では合体（合同体育）というのがあります。ひどい学校の体育の時間は、週3時間の体育のうち、1時間は運動場、もう1時間は体育館、最後1時間は合体になっているのです。そうすると3時間ともやる内容が違うわけですね。運動場で走って、次は体育館でとび箱をしてその次はみんなですべてにゲームをする。そんな流れでは、どんな体育の授業をするのだろうと思います。

それから、物の条件が限られている時、いわゆる用具です。たとえば、ハードル走をやりたいと思ったときにハードルが十分なかったらとてもできません。まだ、ハードルだったら牛乳パックで作ったという例も聞いたことはありますが、鉄棒がなかったら、これはとても作れません。場とか用具とかが保証されていないと、グループ学習が敬遠されるの

だと思えます。

2. 「わかる」内容の欠如

二つ目は、「わかる」内容の用意が十分でない時にもグループ学習は敬遠されてしまいます。教師が体育の授業で教えることを、「できる」や「できばえ」にこだわって、そればかりに目が向いていると、例えばタイムを計って速い方がいいと考えているとグループ学習はしないで済んでしまいます。水泳でも例えば 50m をクロールで何秒で泳いだかということだけを問題にしていたら、グループ学習などしなくても、みんな一斉に並べて「ヨーイ、ドン」でタイムを計って、だれが一番速かったかという授業になりますから、それで済んでしまいます。

ですから、ここをわからせたいということがはっきりしてないと、グループ学習は必要にならないと思うのです。そう考えると、なぜ、水泳は特に敬遠されるのかと考えたのですが、私は水泳でも異質集団のグループ学習はできると思っています。それどころか、水泳の授業こそグループ学習がやりやすいと思っているのです。

3. 水泳の授業こそグループ学習で

他の教材で、例えばバスケットボールだったら、一般的にグループ学習はやりやすいと思われるようですが、集団でやりますからグループで練習したり、試合をしてゲーム分析をしたりするので、形としてはやりやすいということになるでしょう。

しかし、グループでやっていることの中身をよく見ると、シュートが決まってよかった、もうちょっとだったというような励まし合いのレベルのグループ学習で終わっていることが多いのではないかと思うのです。

そういう面では確かに水泳は個人種目ですから、泳ぐこと自体にグループは必要としていないのです。必要としていないからこそ水泳のグループ学習が敬遠される理由でもあると思います。しかも、先程述べた場所や時間という条件から考えると、水泳というのは、すごく悪いです。

どんな児童が多い学校でも、たいていは 25m で 6 コースぐらいのプールが一つしかありません。時間数もシーズン制ですから温水プールがあれば別ですが、プールに入れる時間が限られています。もっとやりたいと思っても、今ごろはプールに入れません。

もっとやりにくいのは合体の形の授業が多いからだと思うんです。他の先生と折り合いをつけて、私はこういうふうにしたいと言わないとできません。学年の先生方の同意がいる。実はここが大変なネックになっているんじゃないかと思うのです。これがなければ、失敗してもいいからやってみようということにもなると思うのです。

水泳というのは、ドル平にしてもクロールにしても運動経過は非常にゆっくりしていますから、走るようにピューッと行ってしまいませぬから、泳ぎがどうなっているのかを子ども同志でもゆっくり見ることができます。そういう面ではグループ学習をやりやすい教材だというふうに思っています。

バスケットボールは、私にとっては非常に難解です。ゲームの中のどこをどう見たらパターンができたと言えるのか私自身十分つかめていないし、それを子どもたちに説明する

となるともっと難しいのです。それに比べたら水泳は単純明快で見たらすぐわかる。ポイントさえ押さええていれば、必ず見れますから、水泳は教え合いのグループ学習にはふさわしいと思っています。

VIII. 「グループ学習事始め」のために

1. 必ず、学習ノート

水泳に限ったことではないのですが、グループ学習を始めていくために、必要なことを2つ挙げておきます。

まずは、教える内容を教師がはっきり持つことだと思います。

そうすれば、その授業をした後にわからせたかったことについて、子どもたちがどのような感想や反応を持ったのかを知りたくなると思うのです。そのことを毎時間ノートに書かせて、それを見るということから始めていくことが、グループ学習の一番のスタートではないかと思うのです。これはグループノートから始めなくても、個人の感想、個人のノートから始めていってもいいのではと思っています。

2. 子ども同士の観察や 教え合いを

もう一つは、子どもたちの観察とか、教え合いを組織していくこと。最初は、私のようにペア学習でもいいから、とにかく授業の中で子どもたちに教え合いの場面を作り出していくことです。できるところから授業を始めていき、うまくいかなかった原因を考え、毎年いろいろな教材で発展させていこうと長い目で考えていけばいいんじゃないかと思っています。

いきなり、グループ学習はこういうふうなものだと考えて実践しようとしても、なかなか難しいので、できるところから始めていくといいと思います。

私は他の教材もグループ学習でやっていますが、やっぱり水泳でやっていることを基準に考えています。とび箱などの個人種目はやりやすいのですが、球技は私にとってはとても難しいです。その原因は、何を教えなければならないかということの理解が不十分だからだと思っています。

わかる内容をそれぞれの教材で追求していくことも、グループ学習を進めていく上では大切なことだと思います。